皆さん

おはようございます。

暑い日が続きますが、いかがお過ごしですか。くれぐれも体調にご留意ください。

私は、2025年8月1日金曜日に大阪で行われた日生財団の地域福祉チャレンジ活動助成団体、実践的課題研究助成等の選考を行い、奈良に移動し、今日は、障害のある人たちの心を歌う「わたぼうし音楽祭」50周年記念演奏会に参加します。私は、社会福祉法人こころの家族の理事長であり、御自身も韓国の孤児の母と言われる田内千鶴子氏の子として、孤児の支援と日本と韓国のソーシャルワーカーの働きの向上に尽くされてきたユンギ先生より講演のご依頼を受け、2023年10月31日から11月2日に韓国を訪問しました。その時お会いしたのが、「わたぼうし」という音楽グループで、障がいをもつ当事者の方々が作詞、作曲された曲を演奏してくださり、とても感銘を覚えました。その活動の原点であるステージを見ることができます。楽しみです。

さて、今日は、長野県のチャレンジをお伝えします。お返事の必要はございません。

１．『｢まいさぽ｣における外国人相談支援の実態と課題に関する調査　調査報告書』長野県社会福祉協議会、令和7年2月

長野県社協のHPに調査報告書ダイジェスト版・調査票・全調査結果が公表されています。＊ダイジェスト版をごらんいただけると見やすい資料になっています。＜長野県社協HP＞　　 <https://www.nsyakyo.or.jp/2025/03/01/13527/>

　「はじめに」おいて、｢生活困窮者自立支援法が制定され、長野県に「まいさぽ （長野県の生活就労支援センターの通称）」ができてから10年、まいさぽでの支援は多岐にわたり、たくさ んの相談者の複合的な課題に向き合い、寄り添って支援してきました。令和2年以降、新型コロナウイルスの流行や、生活福祉資金特例貸付の実施をきっ かけに、今まで相談件数の少なかった層（外国人、個人事業主、若者等）からの相 談が増えました。その中でも、外国人からの相談は言葉や文化の違い、また外国人相談への経験の 少なさから、支援者が苦慮するケースも多く見られました。長野県に住む外国人住民の人口は年々増加しています。同時に、生活困窮に陥る 外国人も増加していくと考えられます。今後、誰もが地域で安心して生活していく ためには、外国人への支援も欠かせません。

　本報告書では、「まいさぽ」での外国人相談の実態を把握し、今後の外国人相談支 援について考えるために調査を行い、まとめたものです。今後の相談支援の一助に なれば幸いです。｣と書かれています。

国の政策で日本におけるいわゆる外国人が増加しているにも関わらず、その権利が尊重され、適正な支援が行われてきたか、私ははなはだ疑問です。本報告は、支援のあり方に対して、誠実に検討しています。

この報告を中心的にまとめた佐藤さんは、以下のように調査の動機について述べてくださいました。

「この調査のきっかけは、私が社協に入職後に関わった「ある外国ルーツの女性」との出会いでした。長年、この地域に居ながら「存在を知られていない・顔のみえない外国人」でした。確かに、ここで生きて暮らしているのですが、地域や人々とのかかわりなく孤立をしていました。

2015年に生活困窮者自立支援事業が始まり、主任として外国ルーツの方にも関わり、コロナ禍では外国ルーツの方が貸付や生活相談で社協に殺到しました。しかし、時間的な制約や経験値が少ない中ソーシャルワークとしてのかかわりには、相談員はたくさんの疑問や課題を抱えたと考えます。

それらを今、振り返りたく、調査研究をしました。外国にルーツのある方を、当たり前に日本の暮らしの中で自然に共に生きていかれるには、ソーシャルワークの力も大変重要になります。

調査を行って改めて「外国ルーツのある方」に特有の問題があることが明らかになる一方、ソーシャルワークやコミュニティーワーク・コミュニティーオーガニゼーションの中で普遍的に日本人でもどのような背景の方でも、共通することがある、それが外国ルーツの方とのかかわりからより明確になったと思います。

なお、冒頭の彼女は、生活困窮者自立支援機関（まいさぽ）も関わり、小規模多機能施設で働くようになり、利用者の皆さんから人気者になっていて、みなさんからとても慕われてます。」

なお、「まいさぽ」は、私たちの仲間で、ガンで亡くなった土屋ゆかりさんが、生涯をかけて築いた事業です。佐藤さんは、後継者としてその実績を丁寧にまとめられました。この調査報告は、、私たちが目指す「共生社会」の実現に近づく一歩に十分なりうると私は信じ、積極的に推薦します。

２．『信州から能登能登へ令和66年度年度長野県社協災害ボランティア・福祉支援本部 Action Report』長野県社会福祉協議会、2025年3月発行

<https://www.dropbox.com/scl/fi/gn3jxdpwrdiluwmz9a0zy/1.pdf?rlkey=bvai73bot5mft5z9lg43dvxdg&dl=0>

『外部支援による臨時福祉避難所の設営に関する報告書－長野県ふくしチームの石川県能登町での活動と提案－』長野県社会福祉協議会、令和7（2025）年3月　<https://www.dropbox.com/scl/fi/fm42wlgazau1rki37ytxf/.pdf?rlkey=5x8adegizkmau17v6rhxo75w3&dl=0>

　以下、Action Reportから、被災地支援活動の一部を紹介します。

＜長野県ＤＷＡＴ（災害派遣福祉チーム）の活動＞

◉ 活動期間：2024年１月8日～ 1月14日　先遣隊 　2024年１月15日～ 3月30日　 25クール

◉ 主な活動場所：石川県能登町

◉ 活動人数：183人（のべ586人）

【外部支援による臨時福祉避難所の設置・運営】

●速やかな先遣隊派遣により能登町のニーズを把握、石川県か ら長野県への要請に基づき、1月8日から DWAT 派遣を開始 〔3月30日まで183人（のべ586人）を派遣〕

●能登町では、町内60か所を超える避難所に「地域を離れたくない」要支援高齢者等が分散していた。

●指定福祉避難所での受け入れが困難な中で、長野県DWATの提案により「臨時福祉避難所」を開設、その運営を支援した。

＜一般避難所での活動＞

長野県ＤＷＡＴは、100名以上が避難していた小木中学校に常駐してＤＷＡＴ活動を行いました。

支援の緊急度が高い避難者のため広域避難、緊急入院、緊急入所等の支援が行われたが、「地域を離れたくない」 要支援高齢者等が各避難所に分散し、スクリーニングをしても受け皿がない状況でした。高齢化率が50% を 超える地域であり、発災後初期の段階から避難所の介護が課題になっていました。

＜臨時福祉避難所の設置、運営＞

福祉避難所の設置にあたって必要な資機材は可能な限り現地で調達し、現地で調整できないものはＤＷＡＴ 本部に連絡して長野県から運搬しました。福祉避難所の定員は20名とし、最大時には16名が滞在、2か月半 の間に30名が利用しました。避難所を巡回した保健師が要配慮者をスクリーニングし、地域包括支援センター の決定を受けて、DWAT が入所支援、退所支援を実施。避難者の支援は日勤を地元のデイサービスセンター 職員が担当し、朝夕と夜勤を長野県ＤＷＡＴが担当しました。　（長野県 DWAT コーディネーター報告から）

　以上のように、長野県のDWATは、避難所支援であり、そこに特徴が見られます。今、自然災害がいたるところで起こっており、どのように対応していくか、避難所の設置への支援は不可欠です。本報告は、被災した時のそれぞれの地域における取り組みに示唆を与えるものでもあり、ぜひ、お読みください。

　ちなみに、私は、長野県社協のさまざまな事業に関わらせていただきました。そして、職員の方々と一緒に学ばせていただきました。災害が起こると、すぐにその場に駆けつける方々ばかりで、だからこそ本報告がまとまったと思います。

３．『実践者•開拓者であれ！　信州の地域福祉の歩み』長野県社会福祉協議会、2023年

<https://www.dropbox.com/scl/fi/xb18fyv75a64bewz556n3/_-1.pdf?rlkey=xe75b5hrfppkz3eot5lg6z92i&dl=0>

本書は、私にとって、とても大切な出版物です。地域福祉実践者のそれぞれの思いと生き方が描かれているとともに、自分の歩みの意味を確認する機会にもなりました。その編集作業を通して、長野県社会福祉協議会元事務局長であり、退任後も長野県の地域福祉に関わってこられた小池正志氏の働きに私は感銘を覚えています。小池氏は、大橋謙策先生の愛弟子で、地域福祉問題を嗅ぎ分け、その対策を模索する嗅覚も鋭く、今も長野県の地域福祉活動に大きな影響を与えています。先輩である小池さんの引退はまだ先のようで、私も励まされ、今も与えられたたくさんの役割を担っています。小池さん、健康にご留意くださり、これからも私の先を歩いていただきたい。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2025年8月3日